

## 宮崎大学における中国語教育の展望

一二教員による連携授業および授業内カード使用の効果について

上原 徳子

A Vision of Chinese Education at the University of Miyazaki  
-A Study of the Effectiveness of Students' Class Reports in  
Collaborative Classes Conducted Alternately by Two Teachers

Noriko UEHARA

はじめに

初修外国語の授業において教員は自らの力量で教授法や教材を工夫し、その試行錯誤の積み重ねにより更に良質の授業を提供している。その際、教員は学生が自分の授業をどう受けとめ、どう授業に参加していたのかを知る必要があるだろう。それによって、自分の授業をより客観的に判断することができるようになる。本稿は、平成21年度の中国語授業の形態や授業内で使用したツールの効果を主に学生へのアンケート調査によって検証し、宮崎大学の中国語教育の今後の展望を述べようとするものである。

本論文では、筆者が先に共著で発表した宮崎大学の中国語教育に関する2論文をふまえ、平成21年度初修外国語・中国語の授業を評価・検討することを目的とする。2論文の内容は次のようなものであった。まず宮崎大学で中国語検定を受験した学生が試験に向けてどのような取り組みをしていたのかを調査し、併せて中級クラスの授業のあり方について検証した。次に日本人教員と中国人教員が連携し、リレー形式で行った授業内での学生の学習意欲向上のためのいくつかの試みについて検討した。どちらも今後宮崎大学において中国語教育をどのような形で行うべきか提言をしている（本論文では前者を「[紀要]「21号論文」、後者を「22号論文」と表現することとする）。

しかし、これらの論文は、前者は検定受験者と中級クラス、後者は初級中国語の一部のクラスのみを対象とした調査だったため、中国語履修者全体の考察ができていなかった。そこで、今回平成21年度初修中国語全クラスの学生に対して以下の事項についてアンケート調査した。日本人教員と中国人教員が1冊の教科書をリレーで講義する形式について、授業内で用いた「出席カード」について、さらに筆者が担当したクラスで用いた「セルフチェックシート」についてである。

以上の結果をふまえて、これまでの授業方式の効果を検証し、今後の宮崎大学における中国語授業の展望を示したい。

なお出席カード及びセルフチェックシートの導入の目的については22号論文内ですでに述べ

ているが、本論文の性格上触れないわけにいかず、重複する部分があるが改めて記述している。また、授業内カードの現物は22号論文の参考資料として既に収録しているが、本稿にも必要であると考へ今回もほぼ同じものを添付した。

## 1 調査の方法について

今回のアンケート調査は、初修中国語全クラス（農学部1組・2組、工学部1組・2組、教育文化学部1組・2組）で実施した。アンケート実施日当日の回答者数は表1のとおりである。また、実施時期は、後期の学期末試験日であった。ただし期末試験は各組の日本人教員・中国人教員それぞれのクラスで行われるため、アンケート調査は、日本人教員の試験日に行った（教育文化学部2組のみ都合により中国人教員の試験日に行った）。したがって、中国人教員の授業のみ（あるいは日本人教員の授業のみ）履修していた学生はアンケートに答えていない。

表 1

クラス	農学部 1 組	農学部 2 組	工学部 1 組	工学部 2 組	教育文化学部 1 組	教育文化学部 2 組
回答者数	44	48	51	54	40	32

## 2 2 教員の連携授業について

### 2.1 授業の実施状況と導入の目的

まず平成21年度の中国語授業体制について簡単に述べておきたい。

中国語の授業は、日本人教員と中国人教員がそれぞれ週1回ずつ担当し、単位はそれぞれの授業で認定されるが、教科書は同じものを使用した。農学部1組を例に説明すると、日本人教員と中国人教員がそれぞれ週1回授業を担当しており、学生は一週間に2度中国語の授業があることになる。この2つの授業はそれぞれ単位を認定するため、厳密にはそれぞれが独立した授業である。また、週2回の授業を構成する1年生は同じであるが、2年生以上の再受講生については、完全に同じ学生が受講しているわけではない。

中国語教育において2教員でのリレー授業は、現在一般に採用されている形態である。初級の段階で週2回の授業内でそれぞれ異なった教科書が用いられた場合、学生は似通った内容を同時並行で学習することになる。2冊の教科書が互いに関連性を持たないと、学生の学ぶべき語彙はほぼ2倍になる。また、学生はすでに学習したことをもう一つの授業で再度学ぶことになり、（これには良い面がないわけではないが）しばしば混乱の原因となる。これらの欠点を解消するため、1冊の教科書を2人の教員がリレー方式で教える形をとることが多い。実際に運用する場合、教員が教科書のどの部分を担当するか初めから決めてある（たとえば本文と文法解説担当に分けるなど）場合もあれば、ペアを組んでいる教員が前回授業を終えた次の部分から教える形をとる場合もある。このような方法をとれば、2冊の違った教科書を同時に学習するよりも授業内容を効率的に消化することができる、或いはより速く教科書の内容を消化して一年間で多くの内容を学ぶことができるなどの利点がある。

宮崎大学でも役割分担型のリレー方式の授業を平成20年度から実施している。導入して2年が経過した段階でこの方式が学生にどのように受け入れられているかを調査することにした。

## 2.2 アンケート結果と考察

学生にはまず日本人教員と中国人教員のリレー授業がうまくいっていたと感じたかどうかを尋ねた。図1のとおり、全クラスで「うまくいっていた」と感じた学生が一番多かった。

表2は、学生になぜその回答を選んだのか答えてもらったものである。学生の記述で重複するものは整理して提示した。は「はい」を選択した理由、はそれ以外を選択した理由である。

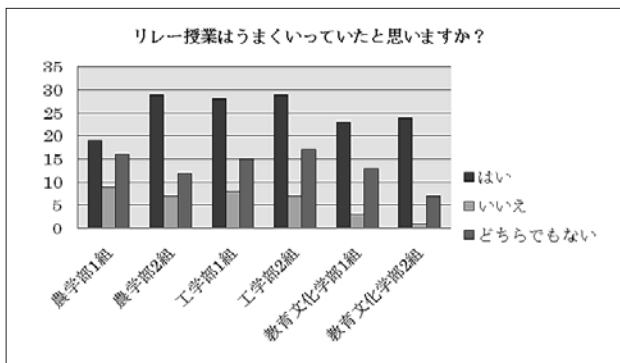


図1

表2

農学部	工学部	教育文化学部
役割分担ができていた 連携がとれていた 文法が分かったほうが覚えやすかったから 文法と会話がバランスよく学べる 忘れていたことを復習できるから ネイティブの発音が聞けるし、文法は日本人のほうがわかりやすい 試験範囲もちゃんと分けられていたから リスニングと文法が同時進行できていてよかった 文法を終えてないのに、中国人の先生の授業で練習問題が宿題になったりしていた うまくいったこともあるし、進度がずれたこともあるから 中国人の先生は文法の説明を全くしてくれないから	連携できていた 説明と発音が分かれていたから 予習復習のかたちになっていたから 理解が深まった 役割分担されていた 会話が中国人の先生なのがよかった 実技と演習的な感じがとてもよかった 同じ週に同じ範囲を学べて理解しやすかった 復習ができて点がとりやすくなったから 発音と文法が覚えられる。 教科書を隅々までした 日本人教員が予習、中国人教員が復習になっていた 悪いところがみつからないから 同じ箇所を二回できて覚え	文法 会話の流れで分かりやすかった うまく繋がっていた それぞれの授業の役割がはっきりしていた 片方の授業で分かりにくかったところをもう片方が補っていて分かりやすかった それぞれの授業の役割がはっきりしていた 連携がうまくいっていた 進度がずれているときがあった 日本人教員 中国人教員という流れだが、逆になっていた 日本人教員の授業の後に中国人教員の授業をするようにしたほうがいい A先生の授業がB先生の授業にフィードバックされてなかった

<p>連携がとれていないときがあった          進度を合わせようと急いでいるときがあったから          教科書を分割していたので、進度が違ってややこしかった          中国人教員と日本人教員の発音が違いすぎて戸惑う          うまくいっている時は良かったが、独自の内容などもあったので、どちらとも言えない          同じ週に両方で同じ課をやっ          てほしかった          進度がずれ、中国人教員の授業が先に進むとよくわからなくなる</p>	<p>やすかった          内容がいつも一致していたとは言えない          時々連携できてなかった          一人の先生だけのほうがプリント整理も楽し分かりやすい          連携しているとは思えなかった          いい事とあまりよくない事がある          一人のほうが分かりやすい          どこをやっているのか分からないときがあった</p>	<p>役割分担は出来ていたが、進度の把握ができていないことも多かった          補完性はあまり見られなかった          ある程度文章を覚えてから文法、という形がわかりやすかった          リレー授業として意識していなかった          時々連携がうまくいってなかった          指導方針に時々矛盾があった</p>
--	---	---

我々が考えていた理想の形は、まず日本人教員が新出の文法事項や新出単語を確認した上で、次の時間に中国人教員が教科書本文の音読や応用会話練習を行うというものだった。多くの学生が好意的に受けとめたのも、やはりこのかたちであった。学生の回答から、実際の授業で2教員の連携がうまく取れていたことや、同じ課を2回学習することでより理解がしやすかったことを「良い」と感じていたことがうかがえる。

一方、否定的な意見には、教員間の連携がうまくいっていなかったことと、休日等の関係で文法 会話の流れが逆転したことなどへの不満が多く見られた。同じ学部で連携が取れていた、取れていなかったの両方の回答があるが、これは回答した学生のクラスが異なっているためである。日程がずれる原因は、カレンダー上の問題があったり、教員がやむなく休講したなどの事情があったからだ。日程の問題などは個々の教員にはどうにもできないことだが、今後、生じたずれを修正する何らかの措置を講じなくてはならないだろう。また、それぞれの教員の教授法を尊重しつつも、2教員が方針を共有して大きな差異が起らないようにし、学生に混乱をもたらさないようにしなくてはならない。

次に、週2回の授業を1冊の教科書で進める方法について学生の感想を尋ねた。図2のように全てのクラスで「良い」と答える学生が多かった。

ただし、回答した学生はこの方式以外で中国語を学んだことがあるわけではないので、この回答は他のやり方と比較してのものではないことに留意する必要がある。

これらの事から、1冊の教科書を用いて2教員がリレー方式で授業を行う方法は、宮崎大学の学生達には好意的に受けとめられていたといえるだろう。

更に、学生にはこの1年を通して中国語の授業に対する満足度を5～1で選んでもらった。満足度が高いほど数字は大きい。下の図3-1と図3-2にその結果をまとめた。

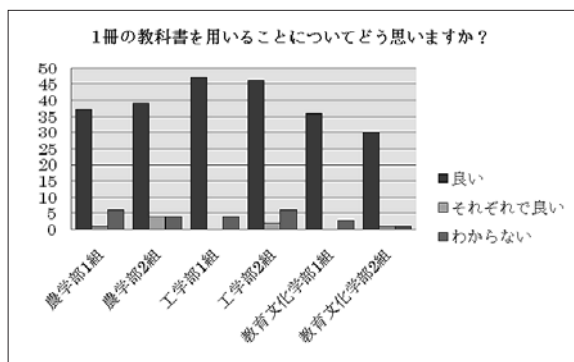


図 2

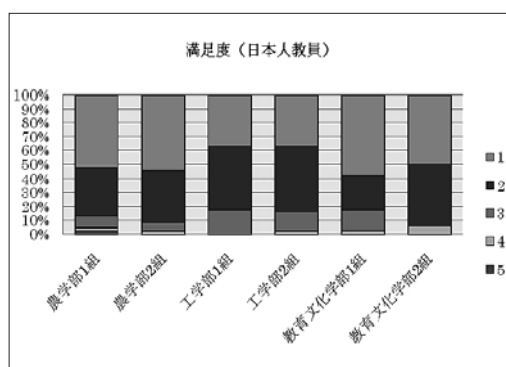


図3-1

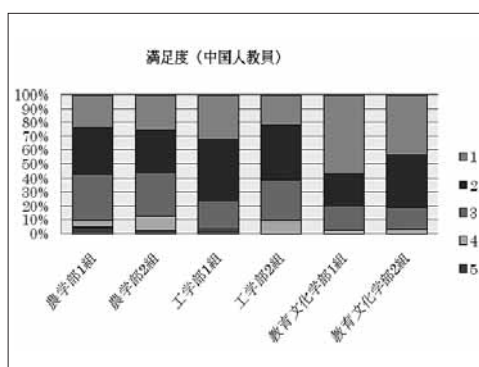


図3-2

その結果、日本人教員については、ほとんどの学生が1または2を選択していた。あまり満足度は高くなかったようである。それに比べて、中国人教員の授業については、2か3を選択する学生が多かった。全体的に日本人教員よりも中国人教員の授業に満足していたことがわかる。22号論文で王が述べていたように多くの学生はコミュニケーション能力を高めたいと考えていることから、学生がネイティブスピーカーである中国人教員の授業に熱心に参加し満足感を得ていたと推察される。それに対して、日本人教員は文法を担当していたため、学生は授業を退屈に感じることも多かったのだろう。日本人教員はより学生の満足するような内容の授業を目指して工夫をする必要がある。

最後に、学生には平成21年度の中国語の授業について感じたことを自由に記述してもらった。以下重複する意見を整理し、各学部ごとにその内容をまとめた。なお、この中には1組・2組、日本人教員・中国人教員の各クラスに対する感想が混在している。は肯定的な意見、は否定的な意見と判断した(表3)。

学生が感じているように、中国語の授業ではまず発音を学習しその後簡単な挨拶に移行するが、後期になると急に新出の文法事項も語彙も増加し、特に年度末になると授業が難解な上駆け足になる。リレー授業で教員は互いの進度を合わせようとするため、進度が速まる傾向が強まってしまったようであった。

表 3

農学部	工学部	教育文化学部
<p>留学生がいたので生の中国語が聞けてよかった</p> <p>範囲がとても広く、難しかった</p> <p>文法が難しく、後期がすごく大変だった</p> <p>後期の日本人教員のテスト範囲が広すぎるので、中間テストを実施したほうが中国語が身につくと思う</p> <p>テスト内容の差が大きくて、少し大変だった</p> <p>中国人教員の授業は、聞いて覚えないとわからないから難しかった</p> <p>中国人教員の授業が分かりにくかった</p> <p>中国人の先生の授業はあまり役に立たなかった</p> <p>もっと宿題を増やしてもいいと思う</p> <p>教科書が分かりにくい</p>	<p>留学生との会話練習が楽しかった</p> <p>出席やテストなど細かい部分をちゃんとしてくれて良かった</p> <p>難しく理解が大変だった</p> <p>後半が一気に難しくなって戸惑った</p> <p>微妙に訳し方が違って分からないところがあった</p> <p>発音がそれぞれ違う部分があり、わかりづらかった。リスニングの勉強ができず不便だった。CDでも違いがあるため、テストでも十分発揮できなかった</p> <p>テストの回数と範囲が多すぎる</p> <p>月曜が祝日で遅れたときのことをちゃんとしてほしい</p> <p>小テストの点数を得点/満点で書かないとボーダーの6割かどうかが分かりにくい</p> <p>スムーズな授業が必要</p>	<p>授業がわかりやすくとても楽しかった</p> <p>音楽や映像やゲーム等を通して楽しく授業を受けることができた</p> <p>中国や中国文化に興味を持てた</p> <p>とても充実していた。これからも中国語の勉強を続けていきたい</p> <p>一年間を通じて楽しいと感じることができたので、中国語を選択して良かった</p> <p>(全クラスで) 後期は急ぎ足になり大変だった</p> <p>(ある教員の) 宿題が明確でないときがあった</p> <p>(ある教員のクラスの) 授業スタイルはクラスに合わなかった。もう少し生徒をよく見てほしい</p> <p>中国人教員の役割が少なく感じた</p> <p>教科書を自分でも勉強できるようなものにしてほしい</p>

筆者は、22号論文の中で、学生自身に学習意欲向上の方法を考えてもらったところ、圧倒的に「中国人（留学生）との直接の交流」と答えたことを述べた。実は、中国語講座は20年度に留学生達と話せる場を昼休みに設け参加を促したが、学生は時間的に都合が悪かったようであまり機能しなかった。そこで、21年度後期には、農学部と工学部の日本人教員クラスに中国人留学生（南京農業大学からの交換留学生）が参加して教員を補助した。具体的には、留学生に教科書の音読をしてもらったり、彼らの学生生活について話してもらったり、学生の会話練習の相手をしてもらったりした。自由記述の中ではこれに対して好印象を持った学生が多かった。多くの学生が留学生に刺激され、学習意欲を高めると同時に中国や中国文化にも興味を持ったようである。今回は交換留学生に協力してもらったが、留学生自身も授業に出席しなければならないため、時間割の都合上留学生は教育文化学部の中国語授業に参加できなかった。できれば学生の意欲向上という意味で、今後日本人教員の担当時間にはいつも留学生が参加できるようにした方が好ましいだろう。

最後に、リレー方式の授業に対する教員側の意見を紹介したい。これは、こちらの質問に自由に記述してもらった。肯定的な意見としては、授業時間に余裕ができた、学生を発音の練習

に集中させることができた、お互いにメールで授業の進度や問題点を共有できた、助けあい無駄なくスムーズに授業が行えたというものがあつた。一方、問題点として、教員にとっては次の週の授業が学生にとってはペア教員の授業を1回はさみ「次の授業」ではないため、自分が出した宿題の解説や小テストは連続性がなくなり不便だったというものがあげられた。

前に、リレー授業導入の理由の一つとして教科書内容の効率的な消化を挙げた。学生が日本人教員と新出の文法事項や語句を学んだ後で、中国人教員と本文を発音したり会話練習をすることにより、スムーズに教科書を進行できると考えたのである。実際は、両教員の説明の内容が重複することもあつたが、ある教員からそれは却って学生の理解を深めているのではないかという指摘もあつた。学生の意見からも、重複が理解を深める助けになったことがうかがえる。内容の重複は非効率的だと考えていたが、宮崎大学の学生にとっては同じ内容を二度授業で扱われた方がより深い理解に繋がっているといえる。

2教員によるリレー式授業は、学生・教員共にほぼ受け入れられているといいてよいだろう。改善すべき点としては、休講（教員の都合だけでなく台風等による）による進度のずれの解消があげられる。先に挙げた学生の意見にも、これに対する不満が挙げられていた。この問題は、ペアを組む教員どうしが連絡をとりあい学生が不安を抱かないよう工夫をすることで解消できるだろう。だが、順番が逆転することで学生側が抱くどまどいや不満は残ってしまう。使用する教科書がこの方式に対応できていないとすればならないし、万が一ペアの順番が逆転しても学生が対応しやすいものにしないといけない。今後は、宮崎大学の現状に適した教科書を作成することが必要である。

### 3 出席カード

#### 3.1 導入の目的

中国語では平成20年度より全クラスにおいて出席カードを採用している。導入は、学生自身の出欠状況と小テストの点数の把握と確認、及び教員と学生とのコミュニケーション手段の確保のためであつた。近年、欠席回数を自己管理できない学生が増加し、必修の科目であるにもかかわらず、安易な欠席を続ける学生もいた。そこで、毎回学生にカードを確認させることにより、安易な欠席を防止できると考えた。また、厳正な成績管理と情報開示の必要性から、教員と学生双方が毎回確認することで、より透明性の高い成績管理を行えると考えた。カードの機能としては、出欠の確認、小テストの確認、その他教員によって分かれるが教員とのコミュニケーション手段という三つがある。

#### 3.2 使用方法

出席カードは前後期にそれぞれ一枚作成する。カードはB6サイズの情報カードに必要な事項を印刷したもの（資料）で、授業日があらかじめ印刷してある。教員はカードを毎時間学生に配布し、授業終了までに回収する。学生は自分でその日の出欠確認欄に印をつけ、同時に前回の小テストの点数を確認する。一方教員は、自分が確認した出欠と学生が印をつけたカードを照合し間違いの無いようにする。また、小テストを行った場合その点数を手元に控えるとともにカードにも記入する。万が一間違いがあれば学生が教員に申し出て、その場合確認の上訂正を行う。

### 3.3 アンケート結果と考察

学生には、まず出席カードがあって良かったかどうかを尋ねた。

図4-1は、アンケート回答者全員の回答の割合を示している。全体では83%もの学生が良かったと答えている。また、図4-2はクラス別の回答割合である。教育文化学部1組の割合が少し低いが、クラス間の差が著しく大きいとはいえないだろう。

次に、学生が出席カードのどの機能を意識していたかを尋ねた(図5)。その結果から、学生自身が最も気にしており導入の主たる動機でもあった出席日数の確認がカードの用途となっていたことがわかった。ただし、特に意識したことはないという回答も12%みられ、授業でのカード使用の目的が一部学生に伝わっていなかったことがわかる。

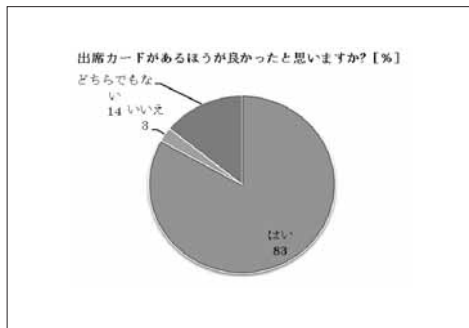


図4-1

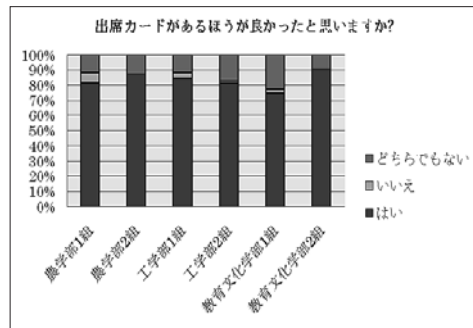


図4-2

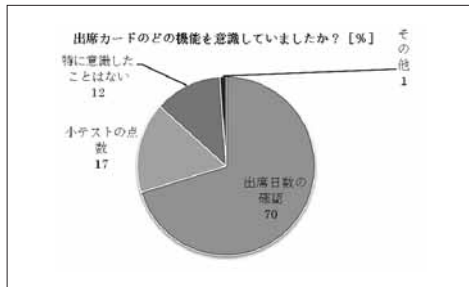


図5

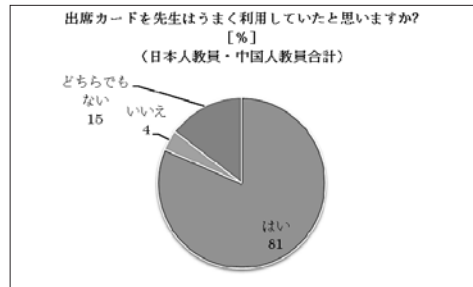


図6-1

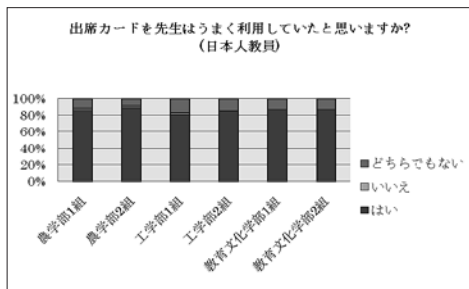


図6-2

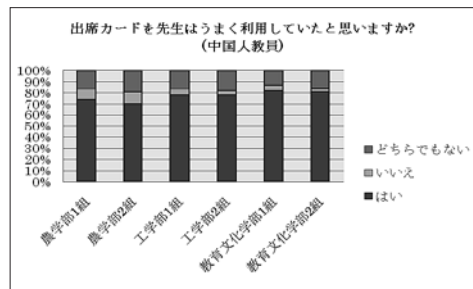


図6-3



さらに、教員は出席カードをうまく利用していたかどうか尋ねた。図6-1によると全体の81%の学生が教師はうまくカードを利用していたと感じていたことがわかった。また、日本人教員と中国人教員それぞれの授業について同様の質問をしたが、クラスによる回答のばらつきはほとんどみられなかった(図6-2・図6-3)。

以上出席カードについてのアンケート結果から、導入の目的は達成できているといえる。クラスによって学生の感じ方にわずかなばらつきはあるが、大きな問題はなかったといえよう。

実際に安易な欠席を防止することができたかどうかについては、その効果を具体的に確認することは難しい。ただし、出欠の管理という面では、新型インフルエンザによる公欠についてカードがあることで学生も教員もスムーズに確認できたのは利点であった。

22号論文内で述べたように、上原担当クラスでの調査では、出席カードについて毎回自分の出席状況の把握ができるだけでなく、出席意欲がわいたと述べた者もあり、出席カードには出欠を確認するだけではない波及効果もあることがうかがえる。

以上の結果から、出席カードの導入は有効であり、今後も使用を継続することが望ましいことがわかった。ただし、出席カード導入以前のデータは何も無く比較する対象がないことから、その効果を証明することはできない。今後継続して使用していく中で、欠席数の減少など顕著な効果が出たのかどうか検証を続ける必要がある。

## 4 セルフチェックシート

### 4.1 導入の目的

清原文代氏は初修外国語(中国語)の授業で「学生に自ら学ぶという意識を持ってもらう」ため自身が見た自律学習で使われる「ポートフォリオ」を「授業で学んだ内容の整理と自己評価に的を絞った」ものにしたプリントを作り活用している。これを「セルフチェックシート」という。これは成績とは関係がないが、テスト前に見直して自分の苦手な部分を把握するものだとして位置付けており、さらに清原氏は、教材に沿って項目を挙げ日本語文を提示し、対応する中国語を書かせたうえで「まだできないと思う」「教科書を見ればできると思う」「たぶん自分一人でできると思う」「人に教えてあげられると思う」という4段階で自己評価を行わせている。また、1課ごとに自己評価させるが、学期の途中で1回収し、返却することで自己評価をしないままの学生がいないようにしている。

宮崎大学では、初修外国語は1年次に履修する必修科目である。語学は授業時間と予習と復習が一体となって初めて身につけることのできるものであるが、実際学生は他にも多くの必修科目を抱えており、語学の授業だけに時間を割くことはできない。また、21号論文でも述べたように、学生は自分で課題をみつけて自宅学習することは苦手であり、受け身の姿勢である。そこで、学生が授業への姿勢や理解度を自己評価し、より授業に積極的に取り組めるように促がそうと考えた。学生が自律した学習をすることは、宮崎大学の学生に最も必要なことだと考えたのである。セルフチェックシートはプリントで別に配布せず、出席カードの裏に印刷することで利便性をはかった(資料)。

### 4.2 使用方法

セルフチェックシートは上原担当のクラスにのみ導入している。

具体的には次のように使用した。授業の最後に出席カードを配布し、学生に今日の授業での

達成目標を提示する。例えば、「形容詞の使い方がわかった」と黒板に書く。それができないときは学生に口頭で伝える。次に、学生にはその目標に対して自分が「1まだわからない」「2なんとなくできると思う」「3できると思う」「4友達に教えられると思う」からどの段階にあるのかを自分で評価させる。これは清原氏のものを参考にした。さらに、自由記述欄に、質問や感想を書けるようにした。

この自由記述欄は、本来学生が自己評価を書くことを想定していたが、記述欄を使用しない学生があると考え、疑問点や感想でも構わないので何でも必ず書かせるようにした。

また、学期の始めに、学生自身で今学期の目標を書かせ、学期の終わりにはそれに対する自己評価を書かせるようにした。学生には、これは成績には全く関係がないこと、自分で自分の学習状況を律していくためのものであることを明確に伝えてある。表4は実際に21年度後期に農学部クラスの学生が設定した後期の目標とそれに対する学生の自己評価である。

自分の設定した目標に対する自己評価をしっかりと書き込んでいる学生の成績を参照したところ小テストはほぼ毎回満点を取り、最終的な点数も8割以上の者であった。それらの学生は、毎回の自由記述欄にも丁寧に自分の達成度を記述しており、自主的に学習に取り組む姿勢がはっきりとみられた。ただ、あまり利用していない(ほとんどの欄が空白)学生の成績が悪いかというそうとは限らなかった。

表4

今学期の目標	評価
テストで良い点を取る	予習が少し足りなかったと思う
遅刻しない	1回ぎりぎりにきたような。でも1回も欠席していないので良かった
授業以外の時間、自主的に取り組む	会話本を使って、1日1フレーズノートに書いて声に出すことにしています。授業外に取り組むとっかかりになればと
小テスト・宿題で良い点数を取る	予習復習不足がたたってとてもではないが良い点は取れなかった
テストで苦労しないよう勉強していく	授業もちゃんと聞いてテストで苦労しないような勉強ができたと思う
中国語をできるだけ話せるようになる	文法がやっと理解できたので、これからはもっと会話ができるような勉強をしていきたいと思う
中国語検定準4級をとれるように努力する	検定を受けられなかったので3月に受けて合格できるようにがんばりたいと思う
中国語検定に合格できるようにしっかりとがんばる	準4級だけ合格できた。中国語が好きになったので来年も中国語を勉強してもっとわかりたい
無遅刻・無欠席と小テストを頑張る	無遅刻・無欠席は達成できた。小テストも自分なりに頑張れた

教員として実際にシートを使用してみて、多くの学生が難解と記入した文法事項については、次週にさらに説明を加えたり、ペアを組む中国人教員に再度説明をして欲しいと連絡することができ、すぐに手当ができるというメリットがあることを利点と感じた。また、セルフチェックシートの自由記述欄は学生とのコミュニケーションの手段としても使うことができた。

### 4.3 アンケート結果と考察

今回、セルフチェックシートを用いた上原担当の3クラスで以下の4つの質問をした。

22号論文で述べたように、前期末にもこれに関連したアンケートをとった工学部と教育文化学部の学生は、カードの効果について、毎回自己評価することにより、自分自身で理解度を測れる、反省ができると述べていた。今回は、この点を改めて検証したい。

1つ目の質問は「あなたはセルフチェックシートを活用できていたと思いますか?」であった。図7のとおり、農学部1組以外の2クラスで「はい」と答えた学生が最も多かった。2つ目にどのような活用をしていたか尋ねたところ、図8のように、ほとんどが到達度の自己点検を目的としてシートを利用していたことが分かる。「その他」と答えた学生は少なかったが、その答えの内容をみると出席カードとセルフチェックシートを混同しており、こちらが想定していた以外の目的で利用していたというわけではなかった。次に、教員がシートをうまく活用していると感じたかどうかを尋ねたところ、図9のように全てのクラスで活用できていたという回答を得た。

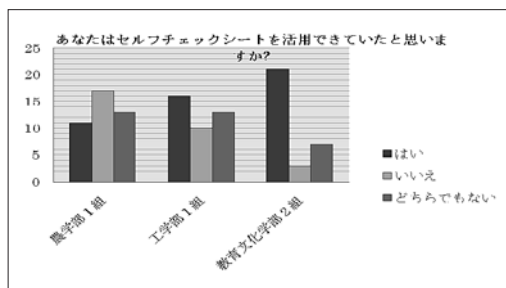


図7

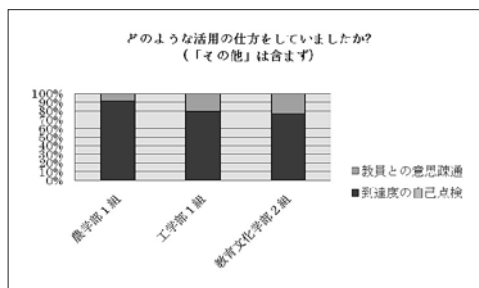


図8

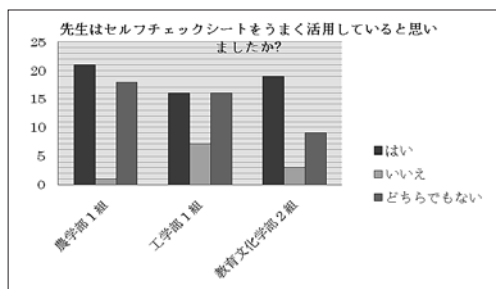


図9

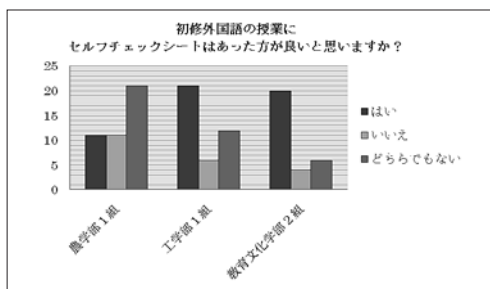


図10

以下の表は、学生に教員はセルフチェックシートをうまく活用していたかどうかを尋ねた際、なぜその回答を選んだのかを答えてもらったものである。重複するものは整理して提示した。は「はい」を選択した理由、 はそれ以外を選択した理由である。

表 5

農学部	工学部	教育文化学部
生徒の疑問を把握してもらえる 理解度を把握してもらえ るから 分からないと答えた人が 多かったところは次の授業 で見直しをしていたから 生徒の意見が反映されて いた 質問には答えていた どのように反映されたか 実感することがなかった	次の授業で質問に答えてく れた 毎回きちんと目を通す旨を 伝えていた 質問に答えてくれた 授業の終わりに記入してと 呼びかけていたから 生徒の意見が反映されてい た 自分の分からないところを 確認できる 意志疎通ができていた 先生が毎回見ているかわか らない 何に使っているか分からな いから 良くも悪くもない 主旨がいまいちわからなかつ た あまり意識したことがない 見てくれていたのか疑問 あまり意味がない気がした	どれくらい理解したかの 確認になる みんなの疑問点が解決で きた 質問にきちんと答えてく れた 分からない所を重点的に してくれた 生徒の意見を聞いてくれ た 分からないところをもう 一度教えてくれた 意思疎通ができた 他の人の質問も説明して くれたから みんなの意見や感想が次 の授業に反映されていた 生徒の意見を聞いてくれ た 活用しているのかわか からない 必要性を感じなかった コメントがなかった 活用されていたのかに少 し疑問を感じる 自分の反省ができた

回答と学生の成績を照合したところ、「はい」と回答した学生と「いいえ」または「どちらでもない」と回答した学生の成績に顕著な違いは見られなかった。つまり、セルフチェックシートの使用が好成績と関連性があるとはいえない。このことから、セルフチェックシートは直接成績を向上させることができるものになっていなかったことがわかった。また、本当に教員が見てくれていたのか疑問をもつ学生がいたのは、教員がセルフチェックシートの自由記述欄を教員とのコミュニケーション手段として使用していたためである。質問があった場合は答えていたが、自己評価のみ書いていた場合は、特に教員が書き込みをしなかった。結局、セルフチェックシートを自分自身の理解度を測るために使用するというより、教員への質問のために使っている学生が多かったようである。学生が不満を持ったのは、清原氏のように、セルフチェック

シートを純粋に学生が自律的に学習するために使用するのか、教員への質問カードとしての機能ももたせるのかを筆者がはっきり示さなかったことが原因だろう。今後使用する際は、学生にわかりやすい形にしなくてはならない。

最後に、初修外国語の授業にセルフチェックシートが必要かどうかを尋ねたところ、図10のように工学部と教育文化学部で積極的な回答がみられた。農学部では「どちらでもない」と答えた者が最も多く、あまり有効性を感じられなかったことがわかる。特に農学部の値が低いのは、その授業時間帯が学生の意欲がわきにくい月曜日の一時限目であったこと、教員がその学生の状況に対応しきれなかったことも原因の一つであろう。

以上の結果をふまえて、セルフチェックシートを使用する際本来の目的達成のためには以下のような改善が必要であろう。

限られた授業時間の中で、セルフチェックシート導入の意味を理解させた上で活用するためだけに時間を費やすことは難しい側面があるのは確かである。とはいえ、導入する限りは中途半端な利用をせず、毎時間使用させて学生に周知徹底させなければ効果が期待できない。毎時間の達成目標があらかじめ決まっていれば授業の初めに提示し、その目標を意識させた上で授業を受け、最後に自己評価することができるだろう。進度の具合によっては、授業中に達成目標を提示できないことも多かった。やはりあらかじめ達成事項を決めておくことが必要ことがわかった。

また、学生が教員に気軽に質問ができる手段を別にもうけ、セルフチェックシート本来の機能を充実する工夫も必要である。

今回セルフチェックシートは上原担当のクラスのみで使用したが、他クラスでの導入には、セルフチェックシートのより効率的な使用方法についてさらなる検討が必要である。

今後の課題として、毎時間の到達目標を授業の始めに提示して、学生に意識付けした上で授業を受けてもらうなど、より効果的に使用できるよう工夫を行いたい。

おわりに

本稿では、平成21年度の初修外国語・中国語授業体制の概要と調査の方法について述べた後、中国語全クラスにおいて2教員が同じ教科書をリレー形式で行う授業方式、また授業で使った出席カードについて、学生の反応に基づいて検討した。その結果、問題点もみられたもののそれらはおおむね受け入れられ有効であり、今後も継続することが望ましいことがわかった。最後に、上原担当の授業で使用したセルフチェックシートについて検討した。その使用方法についてさらに工夫しなければならないが、学生の自律的学習と意欲向上のために続けて用いるのが良いという結論を得た。

筆者はこれまで宮崎大学の中国語教育に関する調査と考察を3度にわたって紀要に発表してきた。それらを通して、今後宮崎大学でどのような中国語の授業を学生に提供するべきか、いくつかの提言をしたい。

#### 1 学習の最終目標をどこに置くか。

まず、宮崎大学の中国語履修者の多くは初級のみを学習し、中級まで続けて学習する者や短期及び長期の留学をするものはごくわずかである。22号論文中のWの調査結果のように学生の中国語選択の動機は、簡単な会話力の習得、あるいは就職活動にいかすための資格習得が大勢

を占めていた。したがって、多くの学生にとっては初級の学習内容をしっかりと身につけ、年度末までに中国語検定の4級を取得できるくらいの力がつけば理想的だといえる。

とはいえ、21号論文にあったように現在のところ中国語検定では準4級はともかく4級以上の合格者はごくわずかという結果しか残せていない。21号論文中で述べたように検定のために時間を割いて学習する学生は極めて少なく、かといって授業中に十分な時間をとって検定試験対策を行うことも不可能である。与えられた課題については誠実に取り組む学生気質を考慮すると、普段の授業に連動させて検定試験対応の練習問題を与えられれば理想的である。そのためには、既成の教科書ではなく自前の教科書が必要であろう。その教科書は検定試験に沿った語彙と文法事項を盛り込むと同時に、宮崎大学の学生が実際に使用しそうなフレーズを本文に含むものがよい。かつ、反復練習を好む学生気質に合った形式の問題を盛り込むべきである。限られた時間でコミュニケーション能力と同時に検定に合格できる力をつけることは非常に難しいが、できるだけ理想に近づける努力は必要だろう。

中国語が話せるようになりたい（その程度は様々であろうが）という学生達の望みは1年のみの学習ではかなわない。彼らの学習意欲を高めるためには、検定合格よりも実際に中国人に触れ、言葉を交わすことが最も重要なことであった。したがって、今後は授業に中国人留学生を参加させる、あるいは、中国人留学生と交流できる場を学内に設けるなどできるだけ生の言葉に触れる機会をつくるべきだろう。また、その意味で中国人教員の授業もその特性をいかしもっと直接学生に発音、発言する機会を与えられるような配慮が必要である。ただしクラスサイズの問題は残る。

以上をまとめると資格取得という目に見える形での目標設定を設けつつ、学生の学習意欲向上に努めることが、宮崎大学の中国語教育に必要なことといえる。

## 2 授業の形式をどうするか。

第2章で述べた学生と教員の反応から、今後も2人の教員がリレー式で進める方式を継続するのがよい。使用する教科書は1冊で、日本人教員と中国人教員は役割分担をして教える。ただし、平成22年度より農学部及び医学部は週1回の授業を1年間行うことになり、工学部・教育文化学部の半分しか授業数が無くなった。週1回の授業にどのように対応していくべきかは今後の課題である。

## 3 授業内のカード使用を続けるか。

第3章でのべたように、これまでの使用実績と今回の学生の反応から、出席カードの使用は続けるほうがよいだろう。セルフチェックシートを全クラスで導入するためには、さらに検討すべき課題はあるが、できれば導入して、学生の自律的学習を促していくことが望ましい。

前述したように、宮崎大学では単位が取りやすいという安易な理由で中国語を選択する学生だけでなく、実際に使う機会を想定して選択する学生が多い。中国語の需要は今後ますます高まることが予想される。宮崎大学の中国語教育は、その要望に応えるために、基本的語彙、文法事項を習得し検定試験（4級程度）に合格し、自己紹介など簡単な会話を実際に中国人と交わす経験をするを目標とするのがふさわしい。また、授業の質の向上のためにもカードを用いて教員だけでなく学生も積極的に授業に参加する形を継続したい。

これ以外に、一クラスが多人数であるという問題や、中級になると週1回しか授業がないなど課題は多いが、ひとまずこれまでの取り組みに対する評価・検討をここで終えたい。

今後の宮崎大学の中国語教育が良質で学生に満足感を与えることができる水準になるために、

教員は以上のような取り組みを継続しておこなうべきであり、それが大学の目指す国際的視野をもち社会に貢献できる人材の育成という大きな目標に繋がるだろう。

筆者は中国語教授法を専門とする者ではなく、採用した方法や検証方法は不十分な点があるかもしれない。また、学生側からだけではなく、授業を行っていた教員の意識調査や教員が感じた実際の運用上の問題点を明確化しなくてはならなかった。より良い授業を提供するためにも、リレー授業の進め方と授業内カードの機能の工夫とその効果の調査を継続していきたい。また、形式やツールからだけでなく具体的な教授内容についての検討も併せて行う必要があるが、今のところそこまで踏み込むことはできていない。今後は宮崎大学の学生に適した教科書作りを通して、内容の検討を続けていきたいと考えている。

#### 注

- i 上原徳子・三好慎一郎「宮崎大学における中国語教育の課題 中国語検定結果を通して」『宮崎大学教育文化学部紀要・教育科学・第21号』（2009年9月）  
上原徳子・王廣慧「宮崎大学における初級中国語授業の学習意欲向上の試み」『宮崎大学教育文化学部紀要・教育科学・第22号』（2010年3月）
- ii 清原文代「自律学習のための試み」『TONGXUE』第37号（2009年2月 同学社）

#### 付記

なお、本論文作成に当たって、アンケートの配布と回収は、宮崎大学教育文化学部中国語講座の藤井久美子准教授に、集計は、宮崎大学大学院教育学研究科学学校教育支援専攻日本語支援教育専修2年の山中鉄齋氏に依頼した。ここに記して感謝したい。

(2010年4月20日受理)

〈資料 実際に使用した出席カード及びセルフチェックシート〉

中国語(月曜日) 前期出席カード

フリガナ 名前	学部	学科	学籍番号	出席番号

	出欠	小テストの点数	備考
1	4/13		
2	4/20		
3	4/27		
4	5/11		
5	5/18		
6	5/25		
7	6/1		
8	6/8		
9	6/15		
10	6/22		
11	6/29		
12	7/6		
13	7/13		
14	7/16水曜		

注意1

小テスト プリントアウトを忘れず提出し、出席点は半分とされます。欠席時・早退は 20 分までしか認めません。欠席超過を受け付けないためには、本学の規定により、75%以上の出席が必須です。3 回の遅刻又は早退で 1 回の欠席とみなします。欠席したときは、特別欠席の決定を経てその期間の小テスト・レポートは 0 点とされます。特別欠席の場合は、履修登録員として初めて出席と見なされます。

セルフチェックシート

今学期の目標→

あなたは今日の授業内容について理解できましたか？(黒板に今日の項目を書きます)

1 まだよくわからない 2 なんとなくできてると思う  
3 できてると思う 4 友達にも教えられると思う

☆今日の反省点、疑問点を右欄にかならず書いてください。感想でも構いません。

	1	2	3	4	
1	4/13	1	2	3	4
2	4/20	1	2	3	4
3	4/27	1	2	3	4
4	5/11	1	2	3	4
5	5/18	1	2	3	4
6	5/25	1	2	3	4
7	6/1	1	2	3	4
8	6/8	1	2	3	4
9	6/15	1	2	3	4
10	6/22	1	2	3	4
11	6/29	1	2	3	4
12	7/6	1	2	3	4
13	7/13	1	2	3	4
14	7/16水曜	1	2	3	4

今学期を振り返って→

--